

中学生のダンスの嗜好と捉え方に関する研究 —中学校1年生対象のアンケート調査を中心として—

松本奈緒 (秋田大学)

Abstract

This study clarifies junior students' preferences for and perceptions of dance and dance learning in physical education. There were 138 junior high school student participants (65 boys, 73 girls). The method of study was a questionnaire, and the topics for clarification were preferences, experiences, and interest/disinterest in dance learning activities. Results are as follows. Altogether, 60 percent the students like to dance, and the girls enjoy it more than boys, with statistical significance; 40 percent of all students consider themselves to be unskilled at dance, and boys have more negative thoughts than do girls, although without statistical significance; 40 percent of students are most interested in rhythmic dance, while the participants did not prefer creative dance or folk dance. 80 percent of students think that positive self-expression, creativity, and ingenuity of movement are core dance concepts, and girls have more positive impressions about those concepts than do boys; students believe that the joy of movement, the joy of partnership and interactions with peers, the joy of creation, and ingenuity are positive characteristics of dance. As opposition it makes difficult to implement and remember dance movement, creation inhibition, human relationship trouble, and other's loose attitude. Girls have more difficulty about human relationship trouble and disagreement with other people than boys.

1. 研究の背景及び目的

学校体育におけるダンス領域は、平成29年度告示の学習指導要領によると「イメージをとらえた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動」であり、創作ダンス、現代的なリズムのダンス、フォークダンスの3つの活動から構成されている(文部科学省 2017)。特に中学校段階のダンス実施は、小学校での表現運動の習得内容を踏まえ、よりダンスの特性に触れる内容を体験させる段階にあり、特に平成20年度のダンス履修の男女必修化に伴い男女の区別なく全員が体験することを担保されている。

このように、文部科学省によりカリキュラム上での履修時間が定められているに関わらず、これまで表現・ダンス領域の学校現場での実施は完全ではなく、実施されていない学校もあるという報告(中村 2009)もある。

これらダンスの実施を妨げる要因の一つとして、ダンス領域が生徒にとって不人気であり、苦手意識を持つ生徒が多いことが挙げられる。芹沢の研究によると中学校の生徒の女子30.4%、男子66.8%が体育で行いたくない運動種目としてダンスを挙げていることが明らかとなったことが報告されている(芹沢 2009)。また、中学校保健体育教諭に対するアンケート調査の中で、生徒の興味・関心が低いこと(中村・浦井 2005)や苦手

意識を持つ生徒や恥ずかしさを感じる生徒への指導が困難である(松本・寺田 2013)ことが問題点であると認識されていることが明らかになった。従って、ダンスの学習者である生徒を対象に、ダンス領域がどのように受け取られているのかを明らかにする必要がある。

さらに、ダンスは現在、平成20年度から履修を男女必修化した。それ以前は男子は武道、女子はダンスを履修していた歴史から、あるいはダンスは女子のものという誤ったジェンダー・バイアスの認識(芹沢 2009)から、男子と女子のダンス経験や捉え方に差があるのか、あるとしたらどのようなものなのか、という疑問も挙げられる。

これまでダンスについて中学校段階の学習者を対象とした研究は、どのようなものが行われてきたのだろうか。中学生を対象としたダンスの授業の捉え方や実施状況に関する全国調査(高橋 2015)、嗜好やイメージの性差について明らかにした研究(猪崎ら 2013)、動機づけや楽しさ、イメージについてテキストマイニング法を用いて分析した研究(内山ら 2013; 内山・阿久津 2014)と自由記述の分析から明らかにした研究(松本・佐々木 2020)、ジェンダーの捉え方の男女差について明らかにした研究(酒向ら 2013a; 2013b)がある。また、ダンス実践後の形成概念の研究(松本 2017; 2018)、ダンスの評価項目の作成についての研究(松本ら 1996; 中村・浦井 2007)がある。

高橋（2015）の研究では中学生8786名を対象とした全国調査において、ダンスの得意・不得意について、全体の37.9%が得意・やや得意と回答し、女子の方が男子よりも統計的有意差を伴ってダンスを得意だと思ったことが明らかとなった。また、ダンスの授業を実施して身についたこととして「表現力」と回答した生徒が43.4%いたことが明らかとなった。

また、猪崎ら（2013）は中学生201名を対象とし、ダンスをすることに對する嗜好とダンスを見ることに對する嗜好に關し、統計的な有意を伴って男子よりも女子の方がより肯定的に捉えていたことが明らかとなった。さらに、この研究では、ダンスを嗜好において肯定的に捉える理由として、「体をよく動かすから」、「リズムにのるから」、否定的に捉える理由として「人に見られるから」、「難しいから」が明らかとなった。

また、酒向ら（2013a）の研究では、中学生103名を対象とし、ダンスの男女別のジェンダー・バイアスについてアンケート調査を実施、ダンスについての捉え方が男子がダンスを男性的なものと捉え、女子はより女性的なものと捉えたこと、ダンスを行うことに關して男子が女子よりも抵抗感があることが明らかとなった。また、酒向ら（2013b）の研究では、ダンスのイメージの男女差について調査し、動きにおける単純性や複雑性について、統計的有意を伴って男女差があることが明らかとなった。

しかし、高橋（2015）の研究において、ダンスの実施状況の実態調査と、ダンスの研究授業の実施、ダンスを實踐してどうだったかが調査の中心であり、ダンスの捉え方に焦点を当てた研究ではなかった為、ダンス全体の嗜好を大枠で捉えたものであり、男女差について分析があったのは一部のみであった。また、猪崎ら（2013）と酒向ら（2013a）の研究はダンスに關するジェンダー・バイアス（男らしさ、女らしさ）の調査の一環としてダンスの嗜好や動きの捉え方の違いを調査したものであり、ジェンダー・バイアスに關連した考察が主であった。

ダンスの特性についてどう考えているのか、また、ダンス活動の中でどの点が肯定的に捉えられており、どの点が否定的に捉えられているのかを踏み込んで調査した研究は中村・浦井（2007）、内山・阿久津（2014）、松本（2017; 2018）の研究の一部のみであり、未だ充分であるとはいえない。従って、これらの点も含めてより詳細に調査する必要性が指摘できるであろう。

そこで本研究の目的として、中学校段階の生徒のダンスやダンス活動に對する嗜好と経験、ダンス特有の特性についてどう捉えているのかを明らか

かにする。また、それらについて男女の差はあるのか、あるとすればどういふ点なのかを明らかにする。

具体的なリサーチクエスチョンとして以下を設定する。

- ① ダンスの嗜好と得意・不得意について、生徒はどう考えているのか。また、両者について男女の違いはあるのか。
- ② これまでの学校やそれ以外でのダンスの経験にはどのようなものがあるのか。
- ③ ダンスの3領域（創作ダンス、現代的なリズムのダンス、フォークダンス）の嗜好や苦手意識について生徒はどう考えているのか。また、男女の違いはあるのか。
- ④ ダンスの特性である自己表現や動きの創作・工夫について生徒はどう考えているのか。また、男女の違いはあるのか。
- ⑤ ダンスの活動の中で生徒が楽しい、面白いと思う所、反対に、苦しい、面白くない、大変だと思う所はどこなのか。また、それらについて男女の違いはあるのか。

2. 研究方法

本研究者の対象者は国立大学附属中学校に所属する中学1年生138名(男子65名,女子73名)であった。本国立大学附属中学校に所属するのは、同国立大学附属小学校出身者が約7割であり、残り3割は他の小学校からの編入者であった。

調査方法は質問調査紙法であり、選択式質問と自由回答でデータ収集を行った。質問項目はダンス領域への嗜好や興味・関心に関する項目であり、以下の全9項目について実施した（資料1参照）。データ収集については、平成29年11月、現代的なリズムのダンスの単元実施中に行った。

資料1：質問調査紙質問項目

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. ダンスは好きですか2. ダンスは得意ですか3. これまでの学校、その他のダンス（表現運動）経験を書きなさい4. ダンスの3つの領域の中で一番興味あるのは何ですか5. ダンスの3つの領域の中で一番行いたくないのは何ですか6. 自分の感情や考えを動きで表現することについてどう考えますか7. 自分の動きを創作したり、動きの隊形を工夫することについてはどう思いますか8. ダンスの活動の中で楽しい、面白いと感じるところはどこですか9. ダンスの活動の中で苦しい、面白くない、大変だと思うところはどこですか |
|--|

分析の方法としては、選択式質問項目（質問項目1, 2, 4, 5）については男女別単純集計した。これに加え、質問項目1と2については統計を用い男女の差を比較した。質問項目1については、質問の選択肢をはい、いいえ、どちらでもないと設定したが、はいを3点、どちらでもないを2点、いいえを1点とスコア化し、男女の差について対応のあるT検定で統計を用い比較した。質問項目2については、質問の選択肢を得意、苦手、どちらでもないと設定したが得意を3点、どちらでもないを2点、苦手を1点とスコア化し、男女の差についてノンパラメトリック検定（Mann-WhitneyのU検定）で統計を用い比較した。統計処理についてはSPSSを用いて処理を行った。また、質問項目4, 5について男女それぞれの選択回答で顕著なものがあるかどうか確かめるために、一要因の分散分析（one way ANOVA）を行った。

自由回答の質問項目については、質問項目3, 6, 7は、選択した理由については特徴的なものを選択し結果と併記しまとめ、質問項目8, 9は、大学でダンス・体育科教育を専門とする研究者1名により、KJ法によって記述内容の意味毎に分類し、各カテゴリーにラベルをつけ一覧表にまとめた。

3. 結果と考察

3-1. ダンスの嗜好と得意・不得意について

質問項目1のダンスの嗜好については、全体の58.0%が「はい」と回答し、約6割の生徒がダンスについては好意的に捉えていることが明らかとなった。一方で16.6%が「いいえ」と回答し、ダンスを好きではないと捉えている生徒が一定数いることが明らかとなった（表1参照）。

表1：中学生のダンスの嗜好

	はい	どちらでもない	いいえ	合計
男子	28 (43.0%)	22 (33.9%)	15 (23.1%)	65
女子	52 (71.2%)	13 (17.8%)	8 (11.0%)	73
全体	80 (58.0%)	35 (25.4%)	23 (16.6%)	138

また、この質問項目についての男女の違いを述べると、「はい」と回答したのが男子43.0%、女子71.2%、「いいえ」と回答したのが男子23.1%、女子が11.0%、「どちらでもない」と回答したのが男子が33.9%、女子が17.8%であった。これらの嗜好性をスコア化しノンパラメトリック検定（Mann-WhitneyのU検定）で男女差を比較した結果、 $p=.001<.01$ （両側検定）であり、1%水準で有意差があることが明らかとなった（図1参照）。このことから、男子と女子を比較すると女子の方がダンスを好意的に捉えており、男子に比べ統計的な有意差があることが明らかとなった。

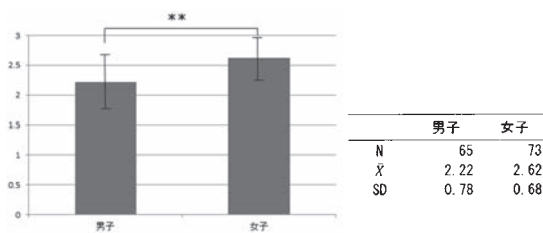


図1：中学生のダンスの嗜好有意差検定

質問項目2のダンスの得意・不得意については、全体の16.7%が「得意」と回答する一方で38.4%が「苦手」と回答し、4割弱の生徒がダンスについて苦手意識を抱いていることが明らかとなった。また、44.9%が「どちらでもない」と回答しており、得意か苦手か不確定であるとの意見が約半数あった（表2参照）。

表2：中学生のダンスの得意・不得意

	得意	どちらでもない	苦手	合計
男子	7 (10.8%)	30 (46.1%)	28 (43.1%)	65
女子	16 (21.9%)	32 (43.8%)	25 (34.2%)	73
全体	23 (16.7%)	62 (44.9%)	53 (38.4%)	138

また、この質問項目についての男女の違いを述べると、「得意」と回答したのが男子10.8%、女子21.9%、「苦手」と回答したのが男子43.1%、女子が34.2%、「どちらでもない」と回答したのが男子が46.1%、女子が43.8%であった。これらの嗜好性をスコア化しノンパラメトリック検定（Mann-WhitneyのU検定）で比較した結果、 $p=.118>.05$ （両側検定）であり、統計的な有意差はみられなかった（図2参照）。男子と女子を比較すると女子の方が平均値で見るとダンスをより好意的に捉えているが、統計的な有意差はないことが明らかとなった。

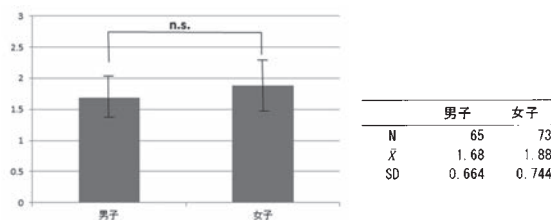


図2：中学生のダンスの得意・不得意有意差検定

高橋（2015）の研究では、全体の37.9%が得意・やや得意と回答し、女子の方が男子よりも統計的な有意差を伴ってダンスを得意だと思ったことが明らかとなっている。この先行研究で得られた結果と較べると、本研究では得意と回答した生徒の全

体に対する比率が少なく、男子より女子の方が得意と回答する割合が多いものの、男女の統計的有意差が得られなかった点が相違する。本研究では研究の対象者が中学校1年生のみであるが、高橋(2015)の研究では中学校1～3年まで幅広いこと、また、本研究では中学校のダンスの授業の実施が少ない段階の生徒の回答であるが、高橋(2015)の研究ではダンスの実施が進んだ段階での生徒の回答であることがこの結果の差異に影響を与えていることが推察できる。つまり、小学校段階での表現運動の履修を含めたこれまでの経験から判断する中学校1年生の段階ではダンスの得意・不得意が定まっておらず、中学校を通してのダンスの履修状況によって、得意・不得意がより明確になり、男女差も大きくなる可能性が示唆される。

3-2. これまでのダンス経験について

質問項目3のこれまでのダンス経験については、小学校については、「ある」と回答したのは全体の75.4%であり、「なし」と回答したのは24.6%であった。男女別にみると「ある」と回答したのは男子67.7%、女子82.2%、「なし」と回答したのは男子32.3%、女子17.8%であった(表3参照)。

表3：中学生の小学校でのダンス経験

	ある	なし	合計
男子	44 (67.7%)	21 (32.3%)	65
女子	60 (82.2%)	13 (17.8%)	73
全体	104 (75.4%)	34 (24.6%)	138

ダンス経験があると回答した生徒がどこで経験したのかという回答については、「学校」が78.3% (男子84.4%、女子74.7%)、「地域」が0.8% (男子0%、女子0.8%)、「習い事」が14.2% (男子8.9%、女子17.2%)、「その他」が6.7% (男子6.7%、女子6.7%)であった。男女ともに学校での経験が最も多く、習い事での経験は女子について顕著であった。

中学校については、「ある」と回答したのは全体の97.8%であり、「なし」と回答したのは2.2%であった。男女別にみると「ある」と回答したのは男子98.5%、女子97.3%、「なし」と回答したのは男子1.5%、女子2.7%であった(表4参照)。

表4：中学生の中学校でのダンス経験

	ある	なし	合計
男子	64 (98.5%)	1 (1.5%)	65
女子	71 (97.3%)	2 (2.7%)	73
全体	135 (97.8%)	3 (2.2%)	138

ダンス経験があると回答した生徒がどこで経験したのかという回答については、「学校」が89.2% (男子81.2%、女子91.2%)、「地域」が0% (男子0%、女子0%)、「習い事」が6.0% (男子6.3%、女子5.9%)、「その他」が4.8% (男子12.5%、女子2.9%)であった。男女ともに学校での経験が最も多く、習い事での経験は男女共にほぼ同じ割合であった。

自由回答で得られたダンス経験の具体例としては、小学校に関しては、学校で体育の授業での表現系ダンスやソーラン節、運動会のダンス、野外活動の時のフォークダンス、集会でのダンス発表、外部指導員のダンスの授業、ダンスクラブでのダンス発表、地域や習い事での日本舞踊、ヒップホップ、バレエ、モダンダンス等があった。中学校に関しては体育授業でダンスを創作し踊った、様々な地域のフォークダンス、行事でのニューソーラン節の体験、習い事としてバレエ、よさこい、その他として動画を見て覚えて踊る、等があった。

授業での表現系ダンスやフォークダンス、外部指導員によるダンス経験の他、行事や課外活動、習い事等でもフォークダンスやリズムダンスについての経験があり、中学校よりも小学校の方が多様であることが明らかとなった。

3-3. ダンス3領域の関心や苦手意識について

質問項目4の創作ダンス、現代的なリズムのダンス、フォークダンスの3領域の中での関心について、一番興味があると生徒が捉えたのは、「創作ダンス」が28.2%、「現代的なリズムのダンス」が41.3%、「フォークダンス」が13.8%、「どちらでもない」が16.7%であり、「現代的なリズムのダンス」について興味があるとの回答が最も多くみられた(表5参照)。

表5：中学生のダンス3領域の中で興味があるもの

	創作ダンス	リズムダンス	フォークダンス	どちらでもない	合計
男子	13 (20%)	23 (35.4%)	14 (21.5%)	15 (23.1%)	65
女子	26 (35.6%)	34 (46.6%)	5 (6.8%)	8 (11.0%)	73
全体	39 (28.2%)	57 (41.3%)	19 (13.8%)	23 (16.7%)	138

男女を比較すると、男女ともに「現代的なリズム」のダンスの割合が多いことは共通するが、女子が「創作ダンス」と「現代的なリズムのダンス」で共に35%以上の高い割合を示すことに対し、男子の「創作ダンス」、「フォークダンス」、「どちらでもない」の割合は僅差であり、それぞれの差が女子に比べて少ないことが明らかとなった。また、

「どちらでもない」の割合は女子（11.0%）に対して男子（23.1%）の割合が大きいことが明らかになった。

また、これらの結果について一要因の分散分析を行った結果、平均値に有意な差は見られなかった。

質問項目5の3領域の中で一番行いたくないと生徒が捉えたのは「創作ダンス」28.3%、「現代的なリズム」のダンスが8.7%、「フォークダンス」が24.6%、「どちらでもない」が38.4%であり、「創作ダンス」と「フォークダンス」がほぼ同じ割合で不人気であった（表6参照）。

男女を比較すると、「創作ダンス」についてはほぼ同割合であるのに対し、「フォークダンス」については男子16.9%、女子31.5%と女子が多く、割合の差があった。また、どちらでもないとの回答が男子41.6%、女子35.6%であり、女子に比べ男子の方が不確定な意見が多いことが明らかとなった。

表6：中学生のダンス3領域の中で行いたくないもの

	創作ダンス	リズムダンス	フォークダンス	どちらでもない	合計
男子	19 (29.2%)	8 (12.3%)	11 (16.9%)	27 (41.6%)	65
女子	20 (27.4%)	4 (5.5%)	23 (31.5%)	26 (35.6%)	73
全体	39 (28.3%)	12 (8.7%)	34 (24.6%)	53 (38.4%)	138

また、これらの結果について一要因の分散分析を行った結果、平均値に有意な差は見られなかった。

3-4. ダンスの特性である自己表現や動きの創作・工夫についてどう考えるか

質問項目6の自己表現については、全135の自由記述回答が得られ、内、肯定的な意見は109（80.7%）、否定的な意見は22（16.3%）、その他は4（3.0%）であった（表7参照）。この結果から約8割の生徒が自己表現を肯定的に捉えていたことが明らかとなった。男女別で肯定的な意見と否定的な意見の比率を比べてみると、肯定的な意見は男子76.2%、女子84.7%、否定的な意見は男子20.6%、女子12.5%であり、男子よりも女子の方がより肯定的に捉える傾向があった。

表7：自己表現についての自由回答数

	肯定	否定	その他	合計
男子	48 (76.2%)	13 (20.6%)	2 (3.2%)	63
女子	61 (84.7%)	9 (12.5%)	2 (2.8%)	72
全体	109 (80.7%)	22 (16.3%)	4 (3.0%)	135

回答の具体例としては、肯定的な意見として、「いいことだと思う」（男子、女子共に）、「自分が苦手なだけにダンスの授業をやってから改めて素晴らしいことだと思うようになりました」（男子）、「自分で表現するとオリジナルでいいと思う」（女子）、「言葉を使わずにある程度感情を伝えることができる表現力がすごいと思う」（女子）等の回答が見られた。否定的な意見として「自分の感情を表現するなど色々あるけどフリーすぎて迷うから苦手」（男子）、「感情を表現するのは少し難しそう」（女子）、「難しい」（男子、女子共に）、「あまりする必要がない」（女子）等があった。

質問項目7の動きの創作・工夫については、全132の自由記述回答が得られ、内、肯定的な意見は112（84.8%）、否定的な意見は13（9.9%）、その他は7（5.3%）であった（表8参照）。

この結果から8割以上の生徒が自己表現を肯定的に捉えていたことが明らかとなった。男女別で肯定的な意見と否定的な意見の比率を比べてみると、肯定的な意見は男子77%、女子91.6%、否定的な意見は男子14.8%、女子5.6%であり、男子よりも女子の方がより肯定的に捉える傾向があったことが明らかとなった。

表8：動きの創作・工夫についての自由回答数

	肯定	否定	その他	合計
男子	47 (77.0%)	9 (14.8%)	5 (8.2%)	61
女子	65 (91.6%)	4 (5.6%)	2 (2.8%)	71
全体	112 (84.8%)	13 (9.9%)	7 (5.3%)	132

回答の具体例としては、肯定的な意見として、「面白いことだと思うし、工夫するとダンスの表現力がさらに高まるので良いことだと思う」（男子）、「自分で動きや考えたりして踊ることは達成感を得られるからいいと思う」（女子）、「自分で動きを作るため、無理なく、自分に合ったダンスを踊れるからいいと思う」（男子）等の回答がみられた。否定的な意見として「苦手なので他の人に任せたいです」（男子）、「難しい」（男子、女子共に）等があった。

3-5. ダンス活動の楽しい、面白いと思う所について

質問8の自由回答として全131の回答が得られた。KJ法による分類の結果、全体の記述カテゴリーとして、「完成・達成」、「創作・工夫」、「皆で」、「動きがそろう」、「多様性・オリジナリティ」、「体を動かす・踊る」、「リズム・音楽にのる」、「協力」、「盛り上がる・ノリ」、「鑑賞」、「自己表現」、「音楽・曲」、「全て」、「褒めてもらう」、「練習」、「その他」が明らかとなった（表9参照）。

これら結果は、中村・浦井（2007）の研究で指

摘された「創る楽しさ、踊る楽しさ、鑑賞成果の活用、鑑賞の楽しさ」、内山・阿久津（2014）の研究で指摘された、良い仲間関係、自由な発想と創作活動の時間の保障、達成感と同様の因子が明らかとなったことが分かる。また、猪崎ら（2013）の研究でダンスを嗜好において肯定的に捉える理由として、「体をよく動かすから」、「リズムにのるから」が見られたが、この2つの要素と同様の因子も明らかになった。

本研究で明らかになったのは、「完成・達成」や「創作・工夫」の категорияにみられる、作品創作する創造的活動の達成感や創ったり工夫したりすることの楽しさが中学生の生徒に肯定的に捉えられ上位を占めていることであった。また、「皆で」、「動きがそろろう」の categoriaにみられる動きの協同性や仲間とユニゾンができることの楽しみが次に上位を占めていることも明らかになった。

男女の比較については、共に上位3位が、「完成・達成」、「創作・工夫」、「皆で」であり、上位を占める categoriaに違いはなかった。中位以下の傾向をみていくと、ダンスにおける肯定的に捉える動きの要素について、若干女子の方が男子よりも「多様性・オリジナリティ」を評価し、男子は女子よりも「リズム・音楽にのること」を評価したことが明らかになった。また、これに関連して、「自己表現」は男子にみられ、女子にはみら

表9：ダンス活動の楽しい、面白いと思う所について

	男子	数	女子	数	全体	数
記述カテゴリー	完成・達成	22	完成・達成	27	完成・達成	49
	創作・工夫	5	創作・工夫	15	創作・工夫	20
	皆で	5	皆で	8	皆で	13
	動きがそろろう	5	多様性・オリジナリ	5	動きがそろろう	9
	リズム・音楽にのる	5	ティ	4	多様性・オリジナリ	7
	鑑賞	3	動きがそろろう	4	ティ	7
	多様性・オリジナリ	2	体を動かす・踊る	4	体を動かす・踊る	6
	ティ	2	協力	4	リズム・音楽にのる	5
	体を動かす・踊る	2	盛り上がる・ノリ	4	協力	5
	自己表現	2	音楽・曲	2	盛り上がる・ノリ	4
	協力	1	全て	2	鑑賞	3
	褒めてもらう	1			自己表現	2
	練習	1			音楽・曲	2
	その他	2			全て	2
					褒めてもらう	1
					練習	1
					その他	2
合計		56		75		131

れず、また、「盛り上がる・ノリ」は女子にみられ、男子にはみられなかった。また、ダンスにおける協同性である「協力」は男子（n=1）よりも女子（n=4）の方が多かった。

3-6. ダンス活動の苦しい、面白くない、大変だと思う所について

質問9の自由回答として全121の回答が得られた。KJ法による分類の結果、全体の記述カテゴリーとして、「動きが難しい・踊れない」、「創作・工夫」、「覚える」、「動きを他者と合わせる」、「リズム・曲と合わせる」、「仲間との人間関係・協力」、「意見をまとめる」、「不公平」、「心のダメージ」、「体力の消耗」、「発表」、「修正」、「練習」、「完成しない」、「時間の有効活用」、「なりきる課題」、「踊ること」が明らかとなった（表10参照）。

表10：ダンス活動の苦しい、面白くない、大変だと思う所について

	男子	数	女子	数	全体	数
記述カテゴリー	動きが難しい・踊れない	14	動きが難しい・踊れない	15	動きが難しい・踊れない	29
	創作・工夫	12	創作・工夫	13	創作・工夫	25
	覚える	10	覚える	9	覚える	19
	リズム・曲と合わせる	3	動きを他者と合わせる	8	動きを他者と合わせる	10
	仲間との人間関係・協力	3	リズム・曲と合わせる	5	リズム・曲と合わせる	8
	発表	2	意見をまとめる	4	仲間との人間関係・協力	5
	修正	2	練習	2	力	5
	心のダメージ	2	仲間との人間関係・協力	2	意見をまとめる	4
	不公平	2	力	2	不公平	4
	動きを他者と合わせる	2	不公平	2	心のダメージ	3
	時間の有効活用	1	完成しない	2	2	2
	体力の消耗	1	体力の消耗	2	体力の消耗	3
			心のダメージ	1	発表	2
			なりきる課題	1	修正	2
			踊ること	1	練習	2
					完成しない	2
					時間の有効活用	1
				なりきる課題	1	
				踊ること	1	
合計		54		67		121

本研究で明らかになったのは、動きや作品の「完成・達成」、動きや作品を「創作・工夫」すること、動きを「覚える」ことが上位3位を占め、生徒にとって苦しい、面白くない、大変だと捉えられたことであった。また、中位の categoriaに着目すると、「仲間との人間関係・協力」、「意見をまと

める]、「不公平」といった、グループ活動での他者との関係性に関するカテゴリーも明らかになった。

また、ダンス活動の楽しい、面白いと思う所についての第2位に「創作・工夫」が、ダンス活動の苦しい、面白くない、大変だと思うところについての第2位に「創作・工夫」がみられ、同じカテゴリーが相反する問いの回答として得られた。これに関しては、ダンスの動きや作品を作ったり工夫したりすることは楽しく・面白い活動であるが、創作時の生みの苦しみも伴い、困難さも感じる為、このような結果となったと考えられる。

猪崎ら(2013)の研究で明らかとなったダンスを否定的に捉える理由として「難しいから」があったが、本研究でも回答が一番多いカテゴリーとして同様のものがみられたことが分かった。また、猪崎ら(2013)の研究で同じく「人に見られるから」という理由や、生徒のダンス履修を困難にするのは「恥ずかしさ」であることの指摘(松本・寺田 2013; 内山・阿久津 2013)があったが、本研究でも「心のダメージ」の一部として恥ずかしさについての回答がみられた。しかし、本研究ではこういった心理的な否定的要因だけでなく、動きの難しさ、創作・工夫、覚えること、仲間との人間関係・協力等、学習内容と対応したより多様な因子が明らかになった。

男女の比較については、共に上位3位が「動きが難しい・踊れない」、「創作・工夫」、「覚える」であり、上位を占めるカテゴリーに差異はなかった。中位を占めるカテゴリーに着目すると、男子の「仲間との人間関係・協力」(n=3)、「不公平」(n=2)、「動きを他者と合わせる」(n=2)、よりも、女子は「動きを他者と合わせる」(n=8)、「意見をまとめる」(n=4)、「仲間との人間関係・協力」(n=2)、「不公平」(n=2)と他者と動きを合わせ、協力・調整することをより否定的に捉えていることが明らかになった。また、男子は「発表」そのものや創作している動きや作品を「修正」されることについて否定的に捉えており、これは、女子にはない男子特有のカテゴリーであった。

4. 結論

研究の結果以下の点が明らかとなった。

- ① ダンスの嗜好については、全体の約6割の生徒がダンスを好きと捉えており、男女差については男子よりも女子の方が統計的に有意な差を伴ってダンスを肯定的に捉えていた。ダンスの得意・不得意については、4割弱が苦手と回答しており、得意と回答した生徒に比べて多かった。また、この点については男女差について統計的な有意差は確認できなかった。

- ② これまでのダンス経験は小学校では7割以上が、中学校では数人以外全員があると回答した。経験場所としては学校という回答が最も多く、授業での経験や学校行事での経験、習い事として等の多様な経験があった。男女差については、小学において男子よりも女子が経験のある人の割合が1割程高かった。
- ③ ダンスの3領域について、約4割が現代的なリズムのダンスに最も関心があると捉えた。男女差については、男子はどちらでもないという回答する割合が2割以上で約1割である女子よりも比率が高い事が明らかとなった。また、行いたくない領域としては創作ダンスとフォークダンスがほぼ同じ割合で不人気であった。
- ④ ダンスの特性である、自己表現や動きの創作・工夫について、両者共に8割以上が肯定的な意見を持っていた。男女の差については男子よりも女子の方がより肯定的に捉える傾向があった。
- ⑤ ダンス活動の中で生徒が楽しい、面白いと捉えているのは、動きや作品が完成・達成すること、動きや作品の創作・工夫、皆で踊ることであった。一方で、生徒が苦しい、面白くない、大変だと捉えているのは、動きが難しいことや踊れないこと、創作・工夫での行き詰った時、動きを覚えることであった。創作・工夫については、肯定的、否定的捉え方両方に見られ、生徒はこれに関し、楽しみや面白さと同時に苦しさ、大変さを感じていることが明らかとなった。男女の違いについては、楽しい、面白いと捉えていることとして、女子の方が男子よりも多様性・オリジナリティを評価し、男子は女子よりもリズム・音楽にのることを評価した。生徒が苦しい、面白くない、大変だと捉えていることとして、女子は男子よりも他者と合わせ、協力・調整することをより否定的に捉えていることが明らかになった。

以上のように本研究により中学生のダンスについて6割が肯定的な嗜好性を持つが、苦手と捉えるものも4割いることが明らかとなった。また、ダンス特有の特徴について肯定的に捉える生徒が多いことが明らかとなった。また、生徒が捉える活動の困難な点や男女差等も明らかとなった。

これら結果を踏まえ今後よりよいダンス指導の改善に活かす材料となることを期待したい。

付記：本研究はA大学T地区ヒトを対象とした研究倫理審査委員会による研究倫理審査を受け受理され(第29-11号)実施されています(平成29年10月31日受理)。

参考文献

- ・猪崎弥生・酒向治子・永田麻里子・田中俊之・米谷淳「中学生のダンス・イメージ、ダンスに対する態度、ダンス授業の評価：質問調査紙を基に」『お茶の水女子大学人文科学研究』9巻、15-24頁、2013年。
- ・中村恭子・浦井孝夫「学習成果からみたダンスの教材特性の検討—生徒の学習評価の観点から—」『順天堂大学スポーツ健康科学研究』11巻、10-20頁、2007年。
- ・中村恭子「中学校体育の男女必須化に伴うダンス授業の変容—平成19年度、20年度、21年度および24年度の推移から—」『日本女子体育連盟学術研究』26号、1-16頁、2009年。
- ・高橋和子（代表）「中学生の調査結果」『平成26年度文部科学省委託事業 中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査』、5-9頁、2015年。
- ・松本奈緒・寺田潤「男女必修化時代の中学校ダンス実施の現状と指導者の問題意識—秋田県中学校保健体育教諭の研修レポートを参考として—」『秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門』68巻、25-34頁、2013年。
- ・松本奈緒「中学校段階のリズムダンスの授業における学習者の形成概念—カードとキネクトによる動きの提示とタブレット型PCによる動きの確認を工夫して—」『秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学編』72集：111-122頁、2017年。
- ・松本奈緒「中学校段階のフォークダンスの授業における学習者の認知—タブレットを用いインターネットで調べたフォークダンスを踊ることを中心にした協働学習—」『秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門』73集、83-93頁、2018年。
- ・松本奈緒・佐々木勝利「中学生のダンスのイメージに関する研究—中学校1年生の自由記述の分析から—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』42号、1-9頁、2020年。
- ・松本富子・高橋健夫・長谷川悦示「子どもからみたダンス授業評価の構造—中学校創作ダンス授業に対する評価の分析から—」『スポーツ教育学研究』16巻、47-54頁、1996年。
- ・酒向治子・永田麻里子・出原智波・角南順子・猪崎弥生「教員と中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』152号、45-49頁、2013年a。
- ・酒向治子・永田麻里子・出原智波・宮本乙女・猪崎弥生「中学生のダンスに対するイメージ—男女差の検討—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』153号、97-102頁、2013年b。
- ・文部科学省『中学校保健体育学習指導要領解説』、2017年。
- ・内山須美子・松尾健太・奥山美希「ダンス学習の動機づけに関するテキストマイニング分析—中学校の『現代的なリズムのダンス』の授業を事例として—」『白鷗大学教育学部論集』7巻1号、71-108頁、2013年。
- ・内山須美子・阿久津隼祐「ダンス学習の楽しさに関するテキストマイニングによる分析」『白鷗大学教育学部論集』8巻1号、89-114頁、2014年。
- ・芹澤康子「体育授業に見るジェンダー・バイアス」『体育の科学』、59巻9号、614-617頁、2009年。